

On the Inherent Ambiguity of Traits and Other Mental Concepts

Jim Uleman

他者への特性の帰属は遍在的だ

- 特性が指すもの（意味）
- 特性が推論される過程

半世紀以上研究されてきたが、まだ初歩的なことしかわかっていない

特性語の意味理解において中心的な（だがこれまで無視されてきた）2つのアイデア

- 特性語のほとんどは他者の心（目標、信念、欲求、意図、恐れ、願望）を指している
- 特性語や他の心的語はそもそも多義的である

これまでの研究をふりかえると

- 帰属理論

Jones & Davis (1965) は意図的行為に着目し、行為者についての推論においては社会的望ましさが重要だということを示した。しかし、意図的行為と意図しない行動とはどのように異なるのかについてはほとんど何も言わなかった。

Kelley (1967) は、行動結果と行為者との共変動（行動の対象や状況とのではなく）が、行為者の何かが結果を引き起こしたという推論の基盤となることを指摘した。しかし、結果を引き起こしたのは行為者の「何」なのかを正確に同定する方法についてはほとんど何も言わなかった。

Reeder & Brewer (1979) は、才能と道德のドメインで、特性推論をつかさどるスキーマをいくつか提案した。しかし、これらの理論や関連研究はどれも、**ある特定の**特性推論に使われる情報の種類についての細かな特徴記述はしなかった。

- 人格理論

古典的な人格研究は、特性を人の不変な性質として扱い、状況には依存しないものと考えたので、文脈の問題については研究を進めなかった。

Wright & Mischel (1987) : 特性の意味は、明示的記述であろうと暗黙的理解であろうと、文脈に依存している。すなわち、文脈を離れて単独で意味を持つかのように特性語を扱うことは意味がない。

問題をさらに厄介にするのは、無意識的過程（特性推論も生み出す）が対人認知の意識的過程と（少なくとも）同じくらい重要だということが、ここ20年の研究で示されてきたこと(e.g., Hassin, Uleman, & Bargh, 2005; Nisbett & Ross, 1980; Uleman & Bargh, 1989)。さらに最近の研究は、意識的な特性推論と無意識的なそれとは体系的に異なると言っている(Ham, 2004; Todorov, Gonzalez, Uleman, & Thaden, 2004; Uleman, 1999; Zarate, Uleman & Voils, 2001)。

なもんで、特性語が何を指すのか、そして語の意味と特性推論のプロセスとの関係を論じるのは、タイムリーでいいんじゃない？

TWO VIEWS OF PERSONALITY TRAITS

"hard"、"warm"、"blue"などの語で誰かを言いあらわすとき、何を意味しているだろうか？これらの概念の性質はどんなものだろう？人についての客観的性質（適切な道具があれば測ることができる¹）を指しているのか？あるいはこれらの語の意味は文脈依存的でほぼすべての文脈がそれぞれ違った意味をもたらすのか？

a hard (energetic) worker, a hard (stingy) paymaster, a judge who is hard on (punitive toward) criminals, a hard (obdurate) opponentはどう似ているのだろう？

恋人の warmth と親の warmth はいろいろと違うはずだし、「"a little blue"な友達」への反応は友達が悲しい

¹ ガラスの破片の硬さ（モース高度）、温度（セルシウス度）、色（オングストローム）みたいに。

のか下品なのかどっちだと考えているかでぜんぜん違う。
人についての記述は物体についての記述よりも本質的に多義的²だ。

人格特性の意味は2つの見解がある

● 見解1：語の意味は明確で不変である

John, Hampson, & Goldberg (1991)：特性は、行動や話や反応などから推論される人の性質を記述しており、人格という fuzzy カテゴリの基本レベルである。

Buss & Craik (1981)：特性語は、段階的構造（特性に関してある行動の典型性を言及できる）を持つ行動カテゴリとして働く。

この見方は、なぜ特性評定の因子分析が一貫して Big Five を生み出すのか（階層構造）を説明する。John (1990) はこれを意味論的構造の反映だと考えている。McCrae & Costa (1990) などは、「人格の5因子モデル」でこれらの因子に因果的地位を与えている。

この見方は社会心理学でも優勢。Asch(1946) に始まる対人認知の研究は人が特性印象を形成するやり方を強調してきた。Anderson & Bower (1973)のHAM(human associative memory)モデルもまだポピュラー。印象形成の理論では、特性概念は不変で分析されない primitive だと考えられている(e.g., Wyer & Lambert, 1994)。特性概念が「活性化」されるということは、活性化されたり適用されたりするのを記憶の中で待っている「そいつ」がいる、ということを含意する。よって、特性の意味は複数の可能性から選択されたり、オンラインで新しく計算されたりするものではない。Asch が文脈依存性を仮定し、30年後に Hamilton & Zanna(1974) が実証したにもかかわらず、対人認知のほとんどの研究(Gilbert, 1998 を参照)は文脈依存性を無視してきた。

● 見解2：語は複数の意味を持ち、文脈が関連する意味を選択する

文脈による選択はしばしば意識を伴わない。

この見解を支持する一連研究1つ目。個人を相手に何日も繰り返し特性評定した場合のEFAはほとんどの人について Big Five を出さない。Nesselroade & Molenaar (1999) は1/3より少ないと報告。Borkenau & Ostendorf (1998) は10%。

2つ目。Wright & Mischel (1987) は、サマーキャンプの子供がどれくらい aggressive か withdrawn かの判断をキャンプ指導員にさせたとき、その判断が「非常に限定された状況での子供の行動」を反映していることを示した。すべての状況での行動や、すべての子供についての同じ状況での行動ではなく。さらに、Wright & Mischel (1988)によれば、指導員は自分の特性判断のこのような条件付きの性質を理解していた。自由記述では特定の状況と特定の社会的行動とを結びつけて書いていた。すなわち、ある子供について aggressive とラベリングしたときには、普通は文脈的修飾語 (aggressive in that the child acts in X way when in Y context) も思い浮かべている。

おまけの話2つ。

このように人格研究者は特性語の多義性を実証してきたが、社会心理学者は行動の多義性も実証している。

Trope (1986), Trope & Gaunt (1999)：葬式で「泣く」のと結婚式で「泣く」のとは異なって理解される（そしてその人の人格への implication も異なる）。

Higgins(1996, review)：行動の特性解釈は文脈依存（論理的に無関係で自覚もない文脈すら含む）。山に登りカヤックで急流を抜けた Donald の話は adventurous とも reckless とも解釈され、どう解釈するかは Donald の話を聞いたときにアクセシブルな特性概念に依存する。

社会心理学者は特性語の多義性もちゃんと調べている。

Dunnig, Meyerowitz, & Holzberg (1989)：better-than-average (above-average) effect は多義的な特性語に関してのみ生ずる。ほとんどの人は creativity に関して above-average だと言うのだが、その人たちは creativity を多様に（自己奉行的に）定義している。musical な creativity だったり、narrative だったり、scientific だったりして、その人が持っている

² 語はいろんな仕方で多義的 ambiguous たり得る。その一つが多義語 = 1つの字句単位が複数の意味を持っていてそれらすべてがコアな意味を共有している。これは同音異義語（=同じ語彙形式だが別種の意味を持つ）とは異なる。同音異義語は辞書には別々で表記されることが多い。例にある"hard"は imperviousness という基本的意味を共有しているが、"blue"は2つの異なる意味を持つ。詳細は Cruse(1986)を参照。

素質に依存している。しかし、punctual のような多義的でない特性にはこの効果は起こらない。

Dunning & Cohen (1992) : 連続的な特性や能力に関してハイスコアな人は他者を good と判断するときの基準がロースコアな人より高い。

Dunning & McElwee (1995) : ある特性(例えば dominant)について自分を高く評定する人は、低く評定する人よりも、その特性をよりポジティブな行動で定義しようとする。よって、実験的に特性の行動的意味をポジティブ/ネガティブに強調すれば、その人の特性の自己評定に影響を及ぼす。

特性(と行動)は多義的だ。しかしこれは通常ほとんど問題にならない。なぜなら文脈が多義性解消をしているから。

じゃあ上に挙げたような例はまれなのか？特性(と行動)が他の概念よりもより多義的だという証拠はないのか？あるんだな、これが。

ARE TRAITS, MENTAL EVENTS, AND BEHAVIORS PARTICULARLY AMBIGUOUS CONCEPTS?

証拠を探っていくと、いろんな種類の多義性が出てくる。

boundary ambiguity

ある実体とその一部分や上位カテゴリとどれくらい明確に区別できるかを考えると、物理的物体(リンゴ、車など)は、活動 activity (映画を見に行く、レストランに行く)や心的事象(考える、夢を見る)よりも区切られている bounded。

Rips & Estin (1998) : 物体、活動のスキプト、心的事象をいくつかの方法で比較した。参加者はまず実体(物体、スキプト、心的事象)の一部分や上位カテゴリを生成³。その後、その一部分 is a kind of 上位カテゴリであるかどうか、その実体 is a part of 上位カテゴリかどうか、を判断。物体については、実体の一部分が上位カテゴリの一種とは見なされない。しかしスキプトや心的事象についてはしばしば見なされる。つまり、物体よりもスキプトや心的事象のほうが部分と全体の均質性がある。性質の名前付けや境界性評定においてもこれを支持。従って、換喩(全体と部分に同じ名前をつける)は物体についてよりもスキプトや心的事象についてよくあって、そういう語は指示対象の境界に関して多義的である。

combination ambiguity

形容詞(例えば特性)の意味はたいてい、名詞と組み合わせたときに変化する。

Murphy & Andrew (1993) : 参加者は単独の形容詞 14 個の反意語をリストし、形容詞-名詞フレーズとして用いられたときの形容詞 63 個の反意語をリストした。一部のフレーズ(e.g., cold water, bright light)は単独の場合と同じ反意語が出るような組み合わせで、他はそうではなかった(e.g., cold facts, bright child)。実際の参加者の反応は、前者では 66%、後者では 25%だけが単独の場合とマッチした。一部の組み合わせには同じ形容詞でも違った意味の出てくるもの(すなわち同音異義語)があり、それ以外は多義語。しかし彼らの分析はこれらを区別していない。2つ目の研究では大きなコーパスから形容詞-名詞フレーズをランダムに選択して分析し、平均マッチ率はたった 51%。反意語ではなく同義語を尋ねる研究でも類似の結果で、44%。従って、形容詞の意味は、組み合わせに関して高度に多義的。

Murphy & Andrew (1993) : ほとんどの形容詞-名詞フレーズの意味が、事前貯蔵されているというよりオンラインで計算されるということを示した。彼らの使った 14 の形容詞はすべて特性としても使えるもの。

Kunda, Sinclair & Griffin (1997) : 行為者についての職業ステレオタイプが特性語の行動的意味を変化させることを示した。aggressive な construction worker と aggressive lawyer とは意味する aggression が異なる。

referential ambiguity

多くの特性は幅広い多様な行動を指し得るし、幅広い行動から含意され得る。そういう点で多義的。

creativity は比較的多義的で、punctual は比較的そうではない。これは上の Dunning らの研究によって実証されている。

³ 例えば、物体なら、リンゴの芯 is a part of リンゴ、リンゴ is a kind of フルーツ。心的事象なら、論理の使用 is a part of 推理、推理 is a kind of 思考。

valence ambiguity

行動はしばしば正反対の *valence* を持つ特性を含蓄する。

上の Donald の記述の例では、Donald は *adventurous* かもしれないし *reckless* かもしれない。(Higgins et al., 1977) 同様に、別の記述では Donald は *independent* と *persistent* ととも解釈され得る。

行動からの特性推論には *valence* 多義性の解が必要。Cruse (1965) では英語の特性語の評価が双峰分布をしていて中立な特性語はレアだということがわかった。

これらをまとめると、

行動記述や心的行為語は物体よりも(少なくとも1つの観点で)より多義的だし、特性語と行動記述はいろいろな観点で多義的。

もちろん日常場面では多義性解消されるのだが、それはそうと、用いられる(統語論的、意味論的、語用論的)文脈から独立しての特性語のベストな or 真の解釈というのは無いように思われる。

おまけの話2つ。

特性語は個人の行為頻度の記述(Buss & Craik, 1981)のみならず、行為の目標の記述(Read, Jones & Miller, 1990)にも用いられる。

helpful は *just gave assistance* と *frequently give assistance* と *chronically want to give assistance* と *are capable of giving assistance* ととも取れる。もちろん、特定の *assistance* の形式は状況や個人特徴に依存していて、*helpful* の多重の意味は *innumerable* になる。

印象形成や将来の行動の予測においては目標よりも特性による記述が好まれるが、誰かの行為をモニタリングしたり強調したりするときは目標が好まれる。(Hoffman, Mischel & Baer, 1984; Hoffman, Mischel & Mazze, 1981)

特性が多義的な行為の解釈を提供するとき、特性と行為記述は同化される。Donald の例。

特性が多義的な行為を判断するための基準や理想を提供するとき、特性と行為は対比される。最初に Erik を *reckless* と記述したら、Donald は *reckless* でなく *adventurous* に見える(Stapel & Koomen, 2001)。

特性は一時的な状態も永続的な特徴も記述し、これは特性の可鍛性についての信念に依存する(Dweck, 1999)。

この話はもちろん、特性は何でも意味し得るということではなく、いろんな仕方で多義的だということ。そして Murphy & Andrew (1993) はオンラインで計算されると言っている。だから、「真の意味」を発見しようとするよりも、**どの種の知識**が特定の状況で特性に意味を与えるのかを調べるほうが生産的。

TWO INTERESTING CLASSES OF KNOWLEDGE THAT DISAMBIGUATE TRAIT TERMS

ほぼどんな知識でも特性語の多義性解消をし得る。

その中でも興味深い2種類

- 心の理論をベースにした心的状態についての知識

特性は心の理論における高次の構成概念である。(e.g., D'Andrade, 1987; Wellman, 1990)

大学生の記述だと、ほとんどの時間ほとんどの人については、単純な特性語が一番よくあるのだが、よく知っていたり判断が重要な相手の場合、特性を使わなくなって、代わりに CAUs(cognitive-affective mediating units)⁴を使う(Idson & Mischel, 2001)。

特性は理論ベースの概念(Murphy, 2002)であり、心の理論が大きな役割を持つ。

心の理論が特性推論の基盤にあるという考えは新しいわけではない(Reeder & Trafimow, Read, Ames を参照)。新しいのは、そのような理論の複雑性と文脈感性が、そこからの単純な推論(例えば特性)に様々な意味を付与する、という考え。

⁴ 感情(ムードや気分)、信念、適性、符号化(解釈やカテゴリ化)、期待、目標、欲求 need、価値など。心の理論のコンポーネント。

筆者は“theory“をゆるく扱っているが、theory をまじめに考えるなら、Kunda & Thagard (1996; Thagard & Kunda, 1998) の並列制約充足モデルが参考になる。これはコンピュータが扱いやすく、対人認知のよく知られた現象の多く（行動の意味のソフト、文脈に依存した特性、説明一貫性の判断、ある人について別の人のアナロジーからの推論、など）をシミュレートできる。

- 具体的経験をベースにした比喩的な抽象概念

Lakoff & Johnson (1999)：抽象的概念（時間、因果、心、自己、道徳など）は大部分比喩的で、具体的経験をもとにしている。

例）時間とお金（物質的資源）：時間を費やす、時間をとっておく、時間を借りる、時間を無駄にする、時間を投資するなど。空間的経験としては、未来は「あなたの前に」過去は「あなたの後ろに」。

最後の例は相反する解釈を生みうるのでとくに興味深い。

誰かが来週の水曜日に予定されている会議を2日先にしたい（ahead two days）とされていて、あなたが時間を通り過ぎる moving through time と思っているならば、会議を金曜日に動かしたいのだと思うだろう。あなたが時間は過ぎてゆく moving past you と思っているならば、会議を月曜日に動かしたいのだと思うだろう。

空間的経験によってどちらの比喩が時間的に多義的な文章の解釈に使われるかをプライムすることはできるが、時間について考えても空間的に多義的な文章の解釈はプライムできない（非対称性）。

心的抽象概念が経験ベースの比喩に由来することを主張したのは Lakoff & Johnson だけではない（e.g., Abelson, 1986）が、いくつかの比喩が同じ抽象概念の理解に使われること、それらが互いに矛盾する可能性もあること、を指摘したという点が刺激的。特性は確かに抽象概念で、しばしば比喩的に理解される。

この話は、embodied cognition の話とつながる。知識というのは、アモーダルな記号システムに排他的に表象されているというよりも、感覚的、運動的、内省的な状態の部分的シミュレーションとして表象されている。（Barsalou, Niedenthal, Barbey & Ruppert, 2003）

Richardson ら(2003)の実験：聴覚的な文理解が続く視覚刺激処理に影響する。

特性語や他の心的概念の多義性、そして多義性解消するのを助ける知識構造の種類、これらをきちんと説明することが今後の進展の唯一の道だ。